

1985

六ヶ所人間記

1982~1984 三年間 六ヶ所村の村人を訪ね歩く
 1985 4月9日 六ヶ所村に核燃料サイクル基地立地を青森県が受諾
 1986 4月26日 チェルノブイリ原子力発電所事故



なぜたたたかうのか
 みなおす



1990

夏休みの宿題は終わらない

英仏核燃料施設周辺に生きる人々に問う
 2011年 3月11日 東日本大震災 福島第一原子力発電所事故
 2015年 8月11日 原発再稼働



2014

だからまいにちたたかう

2003~2012 パレスチナの人々に会う

11月6日 **金** 六ヶ所人間記 2'51(字幕付き)
 開場 5:30 開映 6:00 終映 8:51

11月7日 **土** 夏休みの宿題は終わらない 2'10(字幕付き)
 開場 6:15 開映 6:35 終映 8:45

11月8日 **日** だからまいにちたたかう 1'55(字幕付き)
 開場 6:20 開映 6:45 終映 8:40

上映会参加費 各日1作品:800円 全作参加ご希望の方は3日間の通し券2000円
 中学生・高校生:500円 小学生以下無料

主催 アーヤ・映画で学ぶ 代表 倉岡明子

お問い合わせ akkuraoka@gmail.com 070-2179-4785(11月10日まで)

県民福祉プラザ 県民ホール



<http://fukushiplaza.jp/yoyaku.html>
 〒030-0822

青森県青森市中央三丁目20-30
 TEL:017-777-9191

- 中央環状線「県民福祉プラザ前」下車
- JR青森駅前4番乗り場より
 下記行きで15分
 【市民病院線、横内環状線、問屋町行き、
 大野浜田環状線、朝日放送行き】
 「働く女性の家前」下車 徒歩1分
- 国道4号線
 「市役所前」下車 徒歩15分
 「NTT前」下車 徒歩10分

なぜ たたかうのか みなおす

本年2015年は青森県が六ヶ所村に核燃料サイクル施設立地(原子力発電所から出る使用済み核燃料を再処理する施設、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物施設等々)を正式に受諾した1985年から30年を経過した年にあたる。

数年来40歳代以下の方々から**六ヶ所人間記**の作品名は聞いたことがある、ぜひ観たいと言われていた。また東日本大震災、福島第一原発の事故以来、多くの知人友人から**六ヶ所人間記**、**夏休みの宿題は終わらない**のリバイバル上映会が要請されていた。確かに2015年40歳の方々も30年前の1985年にはまだ10歳。本年50歳以下の方々にとってはほぼ未見の作品であるに違いない。この30年目の機会に、当時の六ヶ所村の人々が迫り来る村の変貌をどのように感じ、考えていたのか、多くの方々に見ていただきたく今回の上映会を企画した。

両作品の中で貴重なご意見を述べていただいた方々の多くはすでにお亡くなりになられた。**六ヶ所人間記**は1982年より1984年の3年間に村人を訪ね歩いた記録である。むつ小川原開発を巡りすでに村は賛否両論で二分されていた。1984年、村人の生活を取材する中で、核燃料サイクル立地案が公表される。六ヶ所村そして青森県民は要請の受け入れを巡り推進派、反対派と再度二分され、村人の生活は大きく揺れた。当時の六ヶ所村村民の声に再度じっくり耳を傾けてみたい。この度は現地の人びとの方言に字幕をつけた。

また英仏の再処理工場周辺に住む人々を記録した**夏休みの宿題は終わらない**は、1988年夏、小学生の息子を伴った一ヶ月の旅の記録である。当時、フ

ランスはラ・アークの再処理工場が出来てから20年が経過していた、イギリスは30年以上である。長い年月が経過していたにも拘らず、チェルノブイリ原発事故2年後でもあり、周辺住民は力強く反対運動を継続していた。英国では白血病に苦しんだ人々の証言が得られた。

1985年の**六ヶ所人間記**、1990年の**夏休みの宿題は終わらない**の両作品は公開当時、多くのメディアで取り上げられ、全国で上映された。

1986年のチェルノブイリ原発事故、2011.3.11 福島第一原発事故にも拘らず2015年8月11日原発の再稼働は開始した。稼働が開始したらもっとも危険な原発になると言われている青森県下北半島の大間原発の建設工事は福島第一原発事故後、中断していたが、すでに2012年には再開されている。六ヶ所村の再処理工場は技術的な問題をかかえ、巨額がつきこまれたが、幸いにもまだ稼働していない。

本上映3本目の**だから まいにち たたかう**は上記2作品と異なり、2014年秋に完成したパレスチナの訪問記である。2003年暮れに初めて訪れたパレスチナは衝撃の大地であった。紛争勃発以来、ほぼ70年、イスラエルに占領された土地に閉じ込められている人々、住居を奪われパレスチナの地を追われ未だに難民生活のままの人々。未来がみえないまま日本と遠く離れた地で、日々が闘いの地に暮らす人々がいる。パレスチナ問題の専門家でもジャーナリストでもない旅人による数回だけの短い旅の記録である。2015年パレスチナ問題がますます見えにくくなってきている今、ぜひご覧いただきパレスチナの人々の声にも耳を傾けていただきたいと願う。 制作者 倉岡明子

六ヶ所人間記 (字幕付き) 1985年 長編記録映画 16mm モノクロ 2時間51分

1986年度マンハイム国際映画祭(西ドイツ)で特別賞を受賞。英国エジンバラ映画祭、香港国際映画祭、パリ・シネマ・ド・レールなどに正式出品される。

制作・構成・インタビュー: 倉岡明子、構成・現場録音・編集: 山邨伸貴、撮影: 小田博 整音: 久保田幸雄、編集助手: 生田聡 ポスター制作: 新居田郁夫 ☆3年間協力してくれた方達: 鈴木志郎康、渡辺公三、若月治、倉岡乾一、山邨玄

だから まいにち たたかう (字幕付き) 2014年 長編記録映画

スタッフ:

アラビヤ語: ガーダ・ウィダー サミヤ・モハマッド・ハッサン ムハンマド・メガヘッド 山根ヌマン・オマル 高岡リム 徳永里砂(アラビヤ語監修) 英語: クリストファー・オル(英語監修) ビー・イマキン 小澤綾 ロバート・シンプソン 音楽: 津軽三味線師 渋谷 和生 しぶたに かずお 和の音 わのおど 音楽コーディネイト: 猿ヶ澤 誠 金澤光信 制作補・音楽導入調整: 山邨玄 デザイン制作: C.S.F.WOOD 大石 賢司 伊東 崇 市原 佳奈 乾 洋史

各界からの反響 1985年 六ヶ所人間記

日本経済新聞(9月11日) 避けえない歴史の流れに身をゆだねる村人の生活と心情を伝える人間味豊かな作品になっている。

毎日新聞(9月12日)「手だれ」の作品にはない新鮮さを持ち、日本の「いま」を静かに訴え、考えさせる点で、映画関係者にも「気になる」作品であろう。

読売新聞(10月28日) 高度成長と近代化のツケが、本当に今深刻なかたちで国土を破壊している。その現状をくつきりとらえたすぐれたドキュメンタリーだ。

朝日新聞(10月24日) 滞在は5泊6日が限度で。。。この玄ちゃんのリズムに合わせて撮影しなければならなかった。しかしその事は村人のゆったりとした生活のテンポとも重なった。

朝日ジャーナル(11月1日号) 玄はスタッフを記録者から村人と同じ生活者へと引きずりおろし、記録する側とされる側という関係の中でできあがる“秩序”を巧みに壊す。素晴らしい「道化」を無意識に演じているのである。

松田政男(公明新聞6月20日)「公」的な撮影対象を記録することが、そのまま撮影主体の「私」的な軌跡ともなりうるとは一種のコペルニスの転回ではないか。

東京大学新聞(9月24日)「六ヶ所人間記」は開発自体の功罪を問うと共に、その渦中において無防備の形で、国家と対峙する他なかつた住民の肉声を収録することによって、スタッフ自らその同時代性を担いつつ個人と国家(個と社会)の問題に新たな照射を投げかけるものである。

ブルータス(11月1日号)日本のドキュメンタリーフィルムが近年極めてスリリングで面白い。今回ようやく東京で公開されることになった「六ヶ所人間記」はそんな流れの中で、85年の貴重な収穫として必見の映画であろう。

クロワッサン(10月25日号)20余人の証言には、大きな時代の波に翻弄されながらも、なお、たくましい人間の生命力が感じられる。

土本典昭(さっぽろ映画祭・特別寄稿) つねに商行為に立つTVやプロ根性なものには撮れない映画、まだお目にかかったことのない質の映画です。それでいてドキュメンタリーの真を確実に一枚めくって見せてくれました。

西嶋憲男(美術手帖9月号) こういう映画が。。映画文化にとってきわめて貴重な意味をもつ実践であることを強調したい。

倉岡明子 プロフィール

1947年青森市生まれ。○最終学歴:上智大学文学部哲学科卒 / 同大フランス文学科博士課程満期終了 / パリ第4大学フランス文学第三課程DEA取得 ○フランス大使館経済部、アテネ フランス文化センター(各種文化事業を主宰)勤務、仏語通訳、日本語・仏語教師業に従事

夏休みの宿題は終わらない (字幕付き) 1990年 長編記録映画 16mmカラー・キネコ 2時間10分

制作・インタビュー・翻訳: 倉岡明子 監督・撮影・編集: 山邨伸貴 スチール: 山邨玄 ポスター制作: 新居田郁夫 当時、ビデオで撮影されたものは映画祭などへ出品は不可能であったがドキュメンタリー作品で その年の話題作となる。日本映画クラブ推薦 ☆協力: 鈴木志郎康、渡辺公三、高木仁三郎、鈴木真奈美、小田博、林加奈子、西谷秀明他

デジタル カラー 1時間55分

マスター・複製制作: (株)東京光音 樋口幸夫 五十嵐まゆみ 松井大貴 ラッシュから完成まで伴走してくれた助言者: 渡辺公三 制作・撮影(2003年—山邨伸貴)・構成・編集: 倉岡明子

☆協力(現地の人を除く): 高坂和彦 足立正生 オマイヤ・アブード 堀越行清 岡村貴千次郎 松尾晴紀 高橋正則 馬込伸吾 / 古賀攻 樋口直樹 飯野真理子 鈴木啓之 金城美幸 / 井上陽子 川合知代 田中邦子 山邨昌代 笹原康子 吉澤直人 東郷 洋 木野真二 森山恭平 部田冬樹 鬼嶋 勇

夏休みの宿題は終わらない

1989年

朝日新聞(11月2日) 英仏の住民とヒザを交えて話合った体当たりの人間記録だ。

毎日新聞(11月2日) 人間の愚かさを改めて実感させられてしまう映画だった。

東京新聞(11月16日) 映画の中に感傷的なコメントはいっさいない。

大下由宮子(デーリー東北12月4日) 試写会で、ラストシーンの映像が消えても誰一人席を立てませんでした。言葉がありませんでした。

1990年

日本経済新聞(1月29日) 夏休みの駆け足の撮影旅行で3人の心に残ったものは、見る者にも宿題として投げかけられるのである。

日刊ゲンダイ(2月2日) ひたすら原子力拡大政策キャンペーンを推し進める日本の当局の“安全”キャンペーンもこのフィルムの前ではただむなしい。

読売新聞(1月25日) 衝撃的な事実が次々と明らかとなり、汚染の実態を克明に捉えた。**松田政男(公明新聞1月25日)** なによりも驚かされるのは親子が訪れたフランスのラ・アークにせよ、またイギリスのセラフィールドにせよ、一言で言い切れば、死の臭いが立ちこめていることだろう。

鈴木志郎康(イメージ・フォーラム1月号) 全編を通して核燃料施設の問題が、生活意識のレベルで語られているわけであるが、その生活のレベルでドキュメンタリーが作られているというところに、この映画のよさがあるといえよう。

クロワッサン(1月25日号) 割りきれない重さがこの映画から伝わってくる。

ぴあ(2月21日) 見えないところで徐々に侵蝕し続ける核の恐怖を淡々と浮き彫りにしてゆく。

かわなかのぶひろ(調査情報2月号) その内容において、その制作形態において、この作品はドキュメンタリーにとって貴重な一石を投じている。

キリスト新聞(1月1日) 青森県六ヶ所村問題などを考えさせる日本人必見のドキュメント映画

だから まいにち たたかう (本上映前の試写会)

毎日新聞(10月22日夕刊) 映画は03年~12年の間、パレスチナの住民が現状に怒り、嘆きつつも生活を紡いでいく様子を淡々と描く

○作品歴 自主制作映画 / 長編記録映画制作 “東京クロム砂漠”(1978) 制作担当 “六ヶ所人間記”(1982-1985年撮影、1985年完成) 1986年・第35回 マンハイム国際映画祭・特別賞受賞 “夏休みの宿題は終わらない” 1990年 “だから まいにち たたかう” 2014年